

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例(女性 10歳未満, 女性 60歳代)あります。型別はO157(VT1VT2), O103(VT1)です。本年の累積報告数は13例となっています。詳細は下記ホームページをご覧ください。

○京都市感染症情報センターホームページ「腸管出血性大腸菌感染症発生状況」

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000068305.html>

- 梅毒の報告が3例(全て男性(20歳代 1例, 40歳代 2例))あります。推定感染経路は全て性的接触です。本年の累積報告数は9例となっており, 過去5年間の年間報告数(平成21年 3例, 平成22年 6例, 平成23年 7例, 平成24年 8例, 平成25年 8例)を上回っています。

全国においても, 梅毒の報告数が, 「感染症法」が施行された平成11年以降で最多となった昨年を上回るペースで増えており, 前年の同時期と比較して約1.3倍となっています。

◆ 今週のトピックス: <咽頭結膜熱>

咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.85(35例)で, 過去5年間の同時期と比較して最も多い報告数となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染症

- 二類: 結核 2例(肺結核 1例, その他結核 1例, 潜在性結核感染者 なし)うち喀痰塗抹陽性 なし
【1月以降の累積報告数 235例(肺結核 116例, その他結核 61例, 潜在性結核感染者 58例)うち喀痰塗抹陽性 57例】
- 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 3例(第30週追加分含む)【1月以降の累積報告数 13例】
- 五類: アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 11例】
- 五類: 梅毒(無症候(無症状病原体保有者) 1例, 早期顕症・I期 2例) 3例【1月以降の累積報告数 9例】

定点把握の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

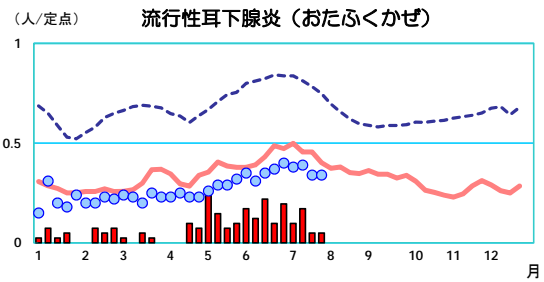
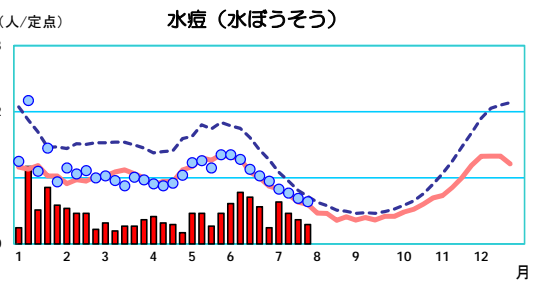
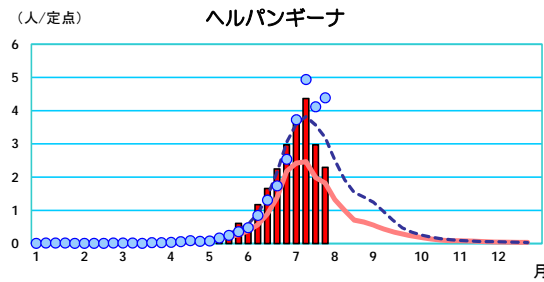
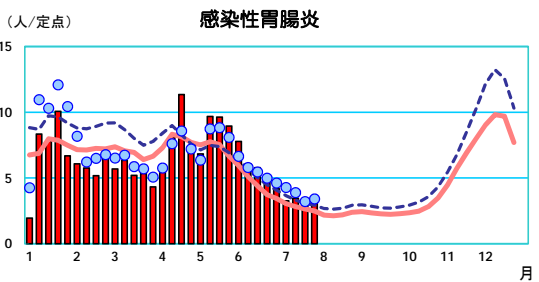
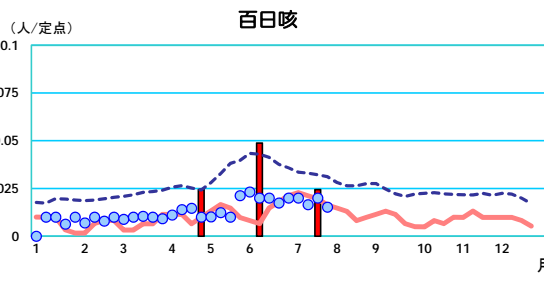
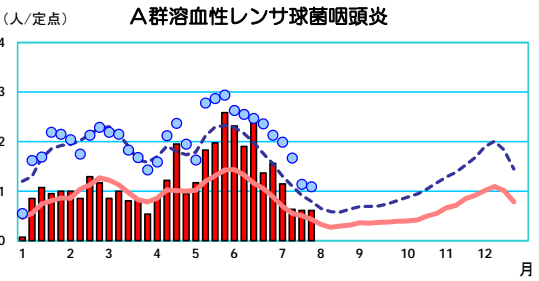
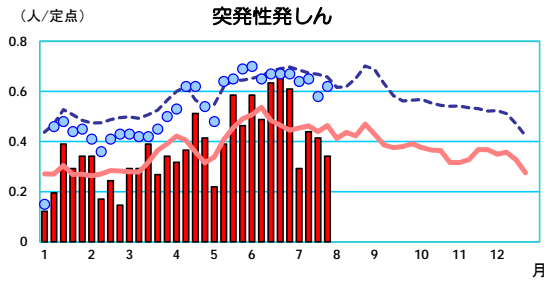
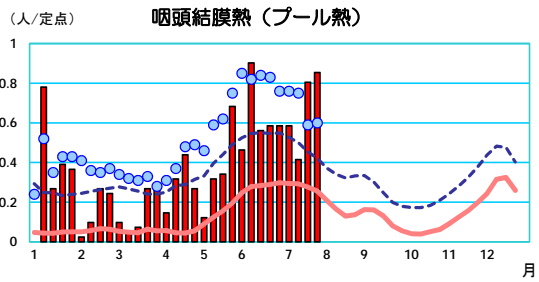
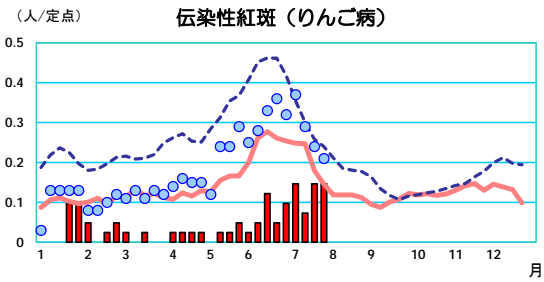
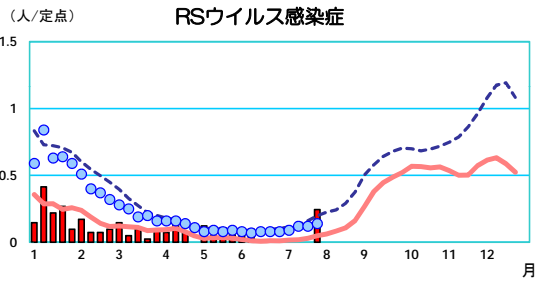
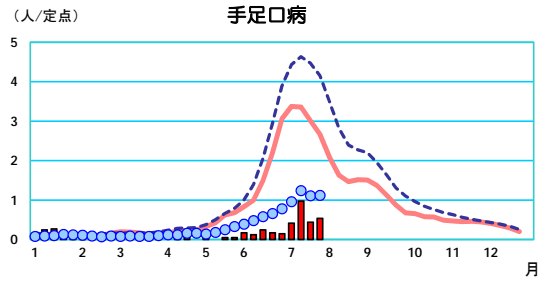
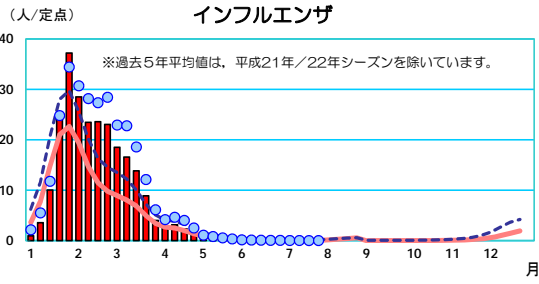
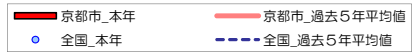
定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	3.29	135
	② ヘルパンギーナ	2.29	94
	③ 咽頭結膜熱	0.85	35
	④ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.61	25
	⑤ 手足口病	0.54	22
眼科	流行性角結膜炎	0.80	8

【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <咽頭結膜熱>

(注) 京都市のデータは, 平成26年8月7日現在の報告数で, 全国の還元データと若干異なる場合があります。
また, 本情報での患者数は, 届出医療機関所在地での集計で, 患者の住所を示すものではありません。

インフルエンザ及び小児感染症の疾病別推移グラフ（平成26年）



第31週(7月28日～8月3日)トピックス: <咽頭結膜熱>

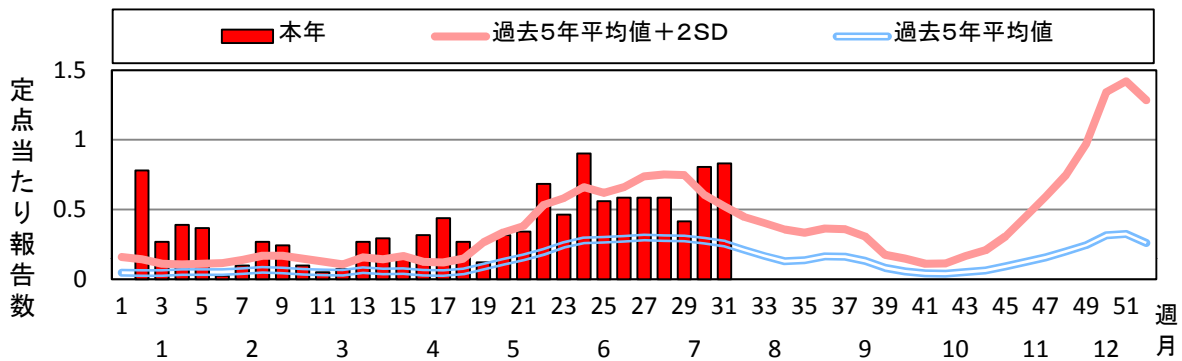
咽頭結膜熱の定点当たり報告数は0.85(35例)で、過去5年間の同時期と比較して最も多い報告数となっています。また、本週の報告数は「過去5年平均値+2SD(*)」を上回っており、過去5年間の発生状況よりもかなり多いことが示されています。

咽頭結膜熱は、例年、6月頃から徐々に増加しはじめ、7～8月に流行のピークを迎えます。昨年は6月に流行のピークを迎えた後、いったん落ち着きましたが、11月以降増加に転じ12月に最大の報告数となりました。本年に入ってから過去5年平均値を上回る状態が続いており、また「過去5年平均値+2SD」を約半数の週で超えていることから、これまでも当トピックスで度々取り上げて注意喚起をしています。さらに報告数が増加する可能性がありますので、今後の発生にいつその注意が必要です。

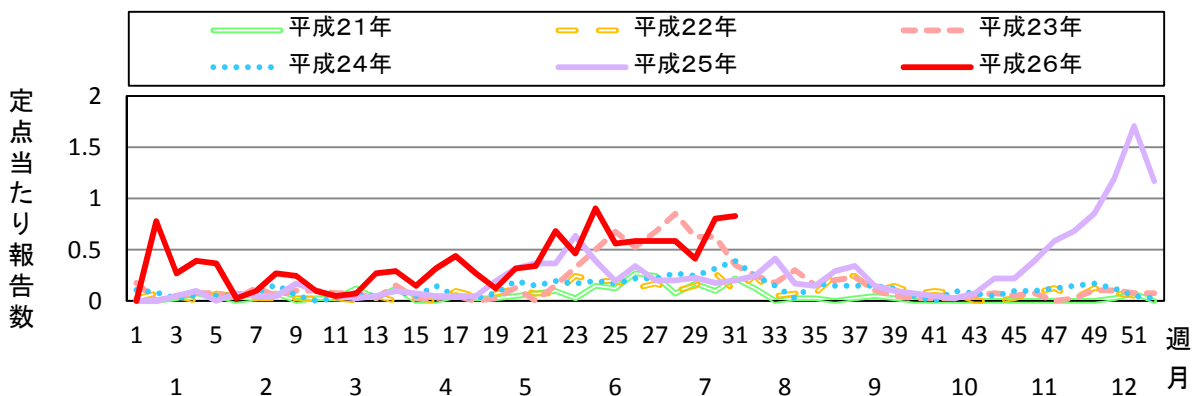
都道府県別では25都府県で前週より増加しており、そのうち近畿6府県では4府県(大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)で増加しています。

(*)SDとは標準偏差のことで、データのばらつきの大きさを示す尺度です。下のグラフにおいて、赤の棒グラフ(本年の定点あたり報告数)がピンクのライン(過去5年平均値+2SD)を超えているときには、過去5年間と比較してかなり多いことを意味しています。

本市の定点あたり報告数の推移



本市の過去5年間との週別比較



都道府県別定点あたり報告数の推移

